

《履修上の留意事項》遠隔授業のみ実施

《担当者名》高橋尚明

【概要】

呼吸器系疾患の病理および疾患概念を学び、それらの疾患に罹患した対象者の障害像を理解する。呼吸リハビリテーションを急性期と周術期、慢性期など対象患者の状況により分類し、必要な評価や症状に対するリハビリテーションアプローチを演習を通じて実践的に学び確認する。特に個々の評価項目が意味する事や、複数の評価項目の関連性について考察し、評価結果を総合的に統合解釈するとともにプログラムの立案を実施する。また、実際に用いるリハビリテーションアプローチについて、徒手のアプローチや運動療法を相互に実施し、相互の経験を通じて、実際の手技の方法ならびに、治療を行う際に考慮すべき事を学ぶ。

【学習目標】

呼吸器疾患を原因とする障害を有する対象者に対し、評価と治療を行う方法を理解するために、呼吸器疾患を要因とする障害の構造を理解し、基本的な評価方法とリハビリテーションプログラムの実施に必要な治療手技を演習を通じて理解し学ぶ。

1. 呼吸リハビリテーションの概要を理解し、説明することができる。
2. 呼吸リハビリテーションの対象となる疾患の病態を理解し説明することができる。
3. 呼吸リハビリテーションを実施するために必要な評価を適切に選択し実施することができる。
4. 呼吸リハビリテーションの各手技の理論と適応について説明し実施することができる。
5. 酸素療法および人工呼吸療法について説明できる。

【学習内容】

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1	呼吸リハビリテーションの概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・呼吸リハビリテーションの歴史</li> <li>・呼吸リハビリテーションの目的</li> <li>・呼吸リハビリテーションの効果とEBM</li> </ul>	高橋尚明
2	呼吸器系器官の構造と機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>・胸郭内臓器の位置と構造</li> <li>・呼吸経路とその構造</li> <li>・換気の力学と呼吸生理</li> <li>・呼吸調節の仕組み</li> </ul>	高橋尚明
3	呼吸器疾患の病態と障害の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・急性呼吸不全の病態生理</li> <li>・慢性呼吸不全の病態生理</li> <li>・神経筋疾患を原因とする呼吸不全の病態生理</li> <li>・呼吸器疾患によって生じるADL障害</li> </ul>	高橋尚明
4	呼吸リハビリテーションに必要な評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フィジカル-エグザミネーション</li> <li>・運動負荷試験</li> <li>・ADL評価</li> </ul>	高橋尚明
5	呼吸リハビリテーションに必要な評価 (演習)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フィジカル-エグザミネーション</li> <li>・運動負荷試験</li> <li>・ADL評価</li> </ul>	高橋尚明
6	呼吸リハビリテーションの実際 (演習)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周術期のリハビリテーション-プログラム</li> <li>・コンディショニング-プログラム</li> <li>・各種の排痰法</li> </ul>	高橋尚明
7	呼吸リハビリテーションの実際 (演習)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・呼吸介助の方法</li> <li>・運動療法の実際</li> <li>・ADL指導</li> </ul>	高橋尚明
8	酸素療法と人工呼吸療法 (演習)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・酸素療法の適応と方法</li> <li>・人工呼吸療法の対象と適応モード</li> <li>・人工呼吸療法 (演習)</li> </ul>	高橋尚明

【評価方法】

定期試験100%

定期試験は返却しないが、個別での問い合わせに対しフィードバックを行う。

【備考】

教科書 : 特に指定せず、適宜資料を配布する。

また、参考図書を含め講義内で参考にすべき文献等を紹介する。

- 参考書 : 千住秀明 他 監修 「呼吸理学療法標準手技」 医学書院 2008年  
高橋仁美 他 著 「動画でわかる呼吸リハビリテーション 第2版」 中山書店 2006年  
石川朗 総編集 「内部障害理学療法学 呼吸(15レクチャーシリーズ)」 中山書店 2010年  
柳澤健 編集 「内部障害系理学療法学(ゴールドマスター・テキスト)」 メジカルビュー社 2010年  
石川悠加 編 「これからの人工呼吸NPPVのすべて」 医学書院 2008年  
後藤昇 他 著 「コメディカルのための画像の見方 X線・CT・MRI・PET」 株式会社エクスナレッジ 2013年  
齋田幸久 著 「胸部X線写真ベスト・テクニック肺を立体で見る」 医学書院 2013年  
百島祐貴 著 「ゼッタイわかる胸部写真の読み方 改定第3版」 医学教育出版社 2005年  
丸山仁司 他 著 「評価から治療手技の選択【内部障害編】」 文光堂 2008年

#### 【学習の準備】

1. 解剖学、解剖学実習、生理学、生理学実習、運動生理学、内科学で学んだ知識を事前に復習し講義に臨むこと(約80分)。
2. 事前に配布する資料の課題について予習し、講義に臨むこと(約80分)。

#### 【ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)との関連】

(DP4) リハビリテーション専門職として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、適切に対処できる実践的能力を身につけます。

#### 【実務経験】

高橋尚明(専門理学療法士、呼吸療法認定士)

#### 【実務経験を活かした教育内容】

理学療法士および呼吸療法認定士としての実務経験を活かし、呼吸リハビリテーションに必要な知識および技術について講義と演習を行う。知識については、基礎医学や病理学を臨床症状と結び付け、評価と治療に必要な考察力を養う。演習については、実際の呼吸リハビリテーション手技について徒手的な介入や人工呼吸器の演習など実践的な演習を行う。